研究課題　中・近世畿内寺院史料の調査・研究と研究資源化―大和元興寺および和泉池辺家史料を中心とする―

研究経費　八四万二五〇〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　服部光真（元興寺文化財研究所）

　所内共同研究者　藤原重雄・遠藤基郎

　所外共同研究者　三宅徹誠（元興寺文化財研究所）・阿部泰郎（龍谷大学）・森下徹（和泉市教育委員会）・澤井廣次（天理大学附属天理図書館）

研究の概要

（１）課題の概要

　有力な寺社が集まる畿内では、今なお多くの中世史料が未調査・未紹介のままとなっている。日本仏教の一大拠点であり、寺院を核として形成された各地域社会や歴史都市を抱える畿内の中世宗教史研究の進展には中小寺院を含めた史料の研究資源化が不可欠である。  
　本研究では、中小規模寺院を中心に大和・和泉の中世史料の再調査および過去の調査成果の精査による研究資源化を行う。具体的には元興寺文化財研究所と史料編纂所の蓄積を照合し、中小規模寺院の中世史料の所在データの情報化および画像のデジタル化を行い、研究資源化を図る。また個別的には「庶民信仰資料」としての性格を付されて資料化された元興寺、一〇世紀に遡る『修善講式』を核とする池辺家史料について、周辺史料を含めた再調査を行い、近年の寺院史料論・宗教テクスト研究の成果を踏まえて史料学的研究を深化させることで、寺院史料・宗教史料の再調査による資料化の具体的実践例として成果を提示する。  
※二〇二〇年度繰越の研究課題と一体的に実施した。

（２）研究の成果

　念仏寺文書は近世初頭から近代までの五三〇点を調査して文書群の全体像を把握するとともに、近世都市社会における浄土宗寺院の様相を具体的に捉えることが可能となった。般若寺文書・池辺家史料については、中世前期までの史料を核としつつも、中世後期から近世にかけての周辺史料をも合わせて対象とすることで、史料群としての伝来や機能、宗教テクスト遺産としての位置付けを検討することができた。これらに関わる個々の史料の個別的な検討を論考としてまとめ、すでに下記成果物も公表している。また、念仏寺文書の袋中良定関係史料、文久修陵関係史料などについては、史料編纂所採訪による他機関等所蔵の史料を参照・比較することにより、その位置づけや史料的価値を検討できた。  
　感染症拡大下を考慮し、元興寺所蔵史料の撮影は、点数が多く状態も多様なため、現状の確認と方針の検討を行い、目録と対照させながら二・三年かけて撮影するのが適当と判断し、下準備の作業を進めた。別途、近く実施したい。あわせて、元興寺文化財研究所による過去の調査資料類を一部通覧して、関連寺社の史料調査状況から、史料編纂所による採訪調査の及ばない範囲を多く確認した。元興寺所蔵の印仏についても、修補で台紙貼りとなる以前の紙背を撮影したフィルムなどを把握している。今後も継続的に、相互補完となるよう個別の所蔵先について丁寧に解決してゆきたい。